市内遺跡発掘調査等事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告(4)

松倉城塁群発掘調査報告Ⅳ

—富山県魚津市鹿熊地内試掘・確認調査報告—

2005

魚津市教育委員会

序

富山県内には、約400箇所以上の城館遺跡が確認されております。これらの中には、大小様々な規模の城や砦跡、居館跡などが含まれております。城館遺跡の中には、今も曲輪や土塁、堀跡などが良好に残っているもの、土中に埋もれてしまったものや古文献にのみその名をとどめているものなど、その在り方は多種多様といえます。県内では城館遺跡の調査や資料収集作業が行われ、400年以上前の越中動乱時代の様相の一端を解明する重要な成果を挙げています。魚津市におきましては、県の史跡に指定されております松倉城跡をはじめ、その周囲に20箇所以上の山城や砦、館跡が確認されています。また松倉城跡のふもとを流れる角川流域には、城下町が広がっていたと考えられていますが、詳しいことはまだわかっていません。

市教育委員会では平成13年度より、松倉城周辺地域に残る遺跡の把握や範囲確認、基礎資料の作成を目的に、試掘・測量調査を実施しているところであります。

今回は、松倉城やその城下町へと通じる出入口にあたる、石の門に隣接した地点の試掘・確認調査と、鹿熊地内に位置する水尾城跡地形測量調査を行いました。水尾城跡は現在市の史跡に指定されておりますが、将来的な保存・活用策を図るためにも、正確な地形測量図の作成がその第1歩となる訳であります。試掘・確認調査では、中世期の遺物が確認され、石の門やその通路の使用時期を考える手掛かりを得ることができました。

最後になりましたが、調査の実施にあたりまして、多大な御協力を頂きました鹿熊地区の方々や関係機関、冬場の調査にあたった作業員の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

魚津市教育委員会

教育長　宮野　高司

例　言

1．本書は松倉城塁群範囲確認調査事業のうち、平成16年度に実施した鹿熊地内における試掘・確認調査の概要報告である。

2．調査は、国庫補助金・富山県補助金を受けて、魚津市教育委員会が調査主体となり実施した。事務局は教育委員会生涯学習課に置き、文化係が担当した。調査担当は、市教委生涯学習課学芸員の塩田明弘が行った。発掘作業は社団法人魚津市シルバー人材センターに委託した。また水尾城跡の地形測量業務は、（株）エイ・テックに、試掘調査現場の一部図化作業は（株）日本テクニカルセンターに委託した。

3．調査期間・対象地・面積は下記のとおりである。

水尾城跡地形測量期間	平成16年７月15日～平成17年２月25日
試掘・確認調査期間	平成16年12月２日～平成16年12月24日
遺物整理期間	平成16年１月４日～平成17年３月31日
地形測量対象地	富山県魚津市鹿熊地内
試掘調査対象地	富山県魚津市鹿熊地内
調査面積	地形測量対象範囲：45,000㎡、試掘・確認調査：71㎡

4．発掘調査現場では、佐藤浩志、水谷圭吾、小林高太、高橋彰則（富山大学人文学部考古学専攻学生）、中川知明（市教育委員会生涯学習課）の協力を得ている。出土遺物の整理作業のうち、洗浄・注記は鍛冶房枝、実測作業は細田隆博（同大学院人文科学研究科考古学専攻）の協力を得ている。

5．報告書作成にあたって、本書の執筆、写真撮影は塩田が担当した。遺物の実測、トレースは細田が行った。

6．本調査で設定した基準杭は、国土座標（世界測地系）を用い、水平基準は標高である。なお、図版中の方位は磁北（M.N）、真北（T.N）、座標北を併用している。

7．出土遺物および発掘調査の記録は、すべて魚津市教育委員会が保管している。

8．試掘・地形測量調査において、地権者の方々や鹿熊地区の住民の方々に御理解・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。（敬称略）

木下宗之、水尾英俊、波岡直義、道音唯夫

9．調査期間中及び遺物整理期間中、報告書作成期間中に下記の方々から指導と助言をえている。記して謝意を表したい。（敬称略）

菅沼幸春（地元城郭研究家）、高岡徹・酒井重洋（富山県埋蔵文化財センター）、
宮田進一（富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所）、
松浦旅人（産業技術総合研究所活断層研究センター）

目　　次

序
例　言
目　次
富山県・魚津市の位置図

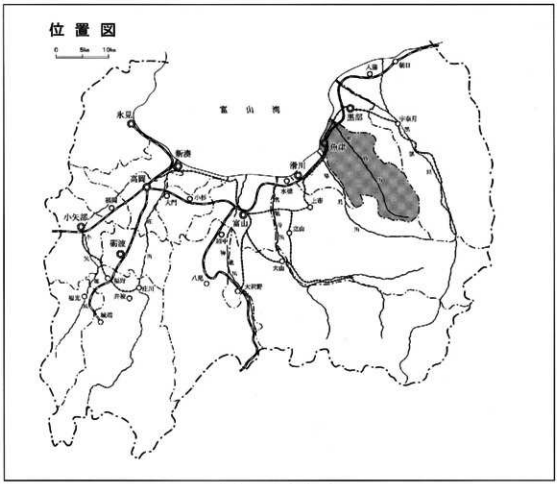
Ⅰ．調査に至る経緯……5
これまでの調査成果（平成13～15年度）

Ⅱ．調査対象遺跡の位置と環境……5
1．石の門塁（石の門）について
2．水尾城跡について
3．升方城跡について

Ⅲ．調査の概要……10
1．調査の方法
2．調査の成果
（1）地形測量調査
①水尾城跡の概要
②升方城跡の概要
（2）試掘・確認調査

Ⅳ．調査のまとめ……17

写真図版
報告書抄録



富山県・魚津市の位置

Ⅰ．調査に至る経緯

魚津市教育委員会では、平成４年度から７年度にかけて、松倉城跡の詳細な地形測量図の作成と考古学的調査による遺構の範囲や年代を特定することを目的とした、松倉城跡範囲確認調査を実施してきた。この調査によって一定の成果があったものの、広大な松倉城跡の様相について、その一端を示すものであり、更なる調査活動が必要とされていた。

そこで、従来の調査・研究をもとに、松倉城跡周辺に位置する山城や砦跡、城下町（居館・寺院・町屋）を含めた遺構の範囲確認や遺存状況の把握を目的に、平成13年度から平成17年度までの５ヶ年による、松倉城塁群範囲確認調査事業を策定した。

これまでの調査成果（平成13～15年度）

平成13年度には、推定城下町区域である鹿熊地内のボンヤシキ地区・ヒョウタン地区（淋光寺遺跡）、オヤシキ地区（鹿熊オヤシキ遺跡）、三枚田地区の各地区にトレンチを設定し、試掘調査を実施した。各調査区において、室町～戦国時代の遺構・遺物を確認できた。特にオヤシキ、三枚田地区では礎石建物と推定される石列や、溝、土坑などを検出し、従来の遺跡範囲よりさらに拡がる点や新たな遺跡（仮称・鹿熊三枚田遺跡）の発見などの知見を得た。出土遺物は、中世土師器皿を主体として他に国産・貿易陶磁器類などで、15世紀後半～16世紀代のものである。

平成14年度は、同じく鹿熊地内に所在する、鹿熊ホーエン遺跡とその周辺の地形測量及び試掘調査を実施した。遺跡中心部である土塁内側の平坦面より15世紀後半～16世紀代に位置付けられる多数の土師器皿が出土した。また遺跡内に築かれた十塁にある出入り口のひとつより、階段状に整形された遺構や十塁外側部分に空堀状の遺構が存在していたことが確認できた。遺跡の性格として、防御性が薄い点や出土遺物の組成から、日常的な生活活動を行っていたのではなく、祭祀的な空間としての様相が濃いことから、寺院跡の可能性が推定された。

平成15年度は、松倉城塁群のうち重要な支城であったと考えられる升方城跡の地形測量図の作成と鹿熊地内の通称「矢竹」と呼称される部分の試掘調査を実施した。これまで、升方城跡は縄張り図のみであり性格な地形測量図の作成を行うことで、遺構の形状や遺存状況、本城の特徴である畝状空堀群を詳細に記録することができた。矢竹地区の試掘調査では、各トレンチにおいて中世土師器皿を中心とした遺物が出土し、新たな遺跡を確認した。その立地から城下町内へ入る監視の役割を担った見張り台などの施設を推定した。

当年度は升方城跡同様、松倉城塁群の１つ水尾城跡の地形測量図の作成と鹿熊・升方両地内にまたがる石の門砦内にある平坦面の試掘・確認調査を実施した。

Ⅱ．調査対象遺跡の位置と環境

魚津市の位置や地勢、城下町があったとされる鹿熊地区の概要、遺跡周辺の歴史的環境、松倉城跡の概要については、これまでの松倉城塁群調査の報告書に記載されているため、本報告では割愛した。

松倉城跡の周辺にある多数の支城や砦跡は、現在25ヶ所確認されており、山地やそこから派生した丘陵地上に立地している（第１図参照）。丘陵は主に凝灰岩や泥岩で構成されている。松倉城跡の所在する城山のふもと、山あいを流れる角川の流域及び丘陵裾部には、かつて城下町があったとされる鹿熊集落が広がる。現在この地区は、宅地と圃場整備の行われた整然とした水田、一部は畑・杉林で

第1図　松倉城塁群関連遺跡分布図（S＝1／50,000）

1．天神山城跡　2．魚津城跡　3．室田砦　4．大谷砦　5．大谷尾根砦　6．稗畑砦　7．荒惣山砦
8．後藤城跡　9．北山城跡　10．坪野城跡　11．小菅沼C城跡　12．小菅沼武家屋敷跡　13．小菅沼A城跡
14．小菅沼B城跡　15．焼山砦　16．鹿熊オヤシキ遺跡　17．淋光寺遺跡　18．松倉城跡　19．升方城跡
20．鹿熊城殿遺跡　21．南升方城跡　22．石の門砦　23．水尾城跡　24．水尾南城跡　25．赤板砦

第２図　調査区周辺図（Ｓ＝1／10,000）

1．石の門砦　2．南升方城跡　3．鹿熊城館遺跡　4．升方城跡　5．鹿熊矢竹遺跡　6．焼山砦
7．鹿熊オヤシキ遺跡　8．淋光寺遺跡　9．鹿熊三枚田遺跡　10．鹿熊ホーエン遺跡　11．水尾城跡

占められる。鹿熊地区を貫流する角川は、やや蛇行しながら富山湾へと注いでいる。中流域は「宮津」など川港の存在を想起させる地名が残り、河口付近は昭和初期まで魚津港として賑わっていた。そのため松倉城跡やその周辺の調査で出土する中国製の磁器や多数の国産陶磁器の運搬に、角川が利用されていたと考えられる。地質学的には、氾濫を繰り返していた早月川に比べ、角川の方が穏やかであったとされ、その水運を利用していた可能性が指摘できる。

今回試掘・確認調査を実施した石の門砦と地形測量を実施した水尾城跡は、市の南部、角川と早月川に挟まれたほぼ南北に延びる升方丘陵に位置する。その丘陵上には、平成15年度に地形測量調査を実施した升方城跡、南升方城跡や水尾南城跡が並び、富山方面に対する防御線としての城塁群が形成されている。そして升方南城跡と水尾城跡の間の鞍部にあたる地点が、石の門砦である（第１～３図参照）。鹿熊集落からは南西約900m、松倉城跡のある城山（標高約430m）からは西へ約150mの位置にある。

１．石の門砦（石の門）について

城下町があったとされる鹿熊集落や松倉城へと通じるための出入口（大手門）とされ、中世の山街道が早月川からこの砦内にある石の門を通っていたと考えられている。砦の中央部は、コの字形の土塁を備えた方形の曲輪を始め幾つかの平坦面（削平地）を設けている。曲輪の北西側には、市の史跡に指定されている石の門がある。これは、直径70～80cm大の川原石を高さ３～４mに積み上げ、幅３m程の通路を挟んで向かい合わせた石組遺構である。築造時期は中世末期とされるが、詳細は不明である。なお石の門付近では、過去に珠洲焼片が採取されている。昭和50年代の市道工事の際、石の門の内側（鹿熊集落側）の平坦面（曲輪）において、６個の礫石（２間×１間）が発見されたことから、建物の存在が確認されている。現在石の門を通りぬける通路は、市道の下側を暗渠状にくぐり抜けて集落付近まで通じている。市道が建設される昭和50年代までは、この通路（旧道）を使用し、鹿熊地区から升方地区へと双方の人々が往来していたという。また、同じ丘陵尾根上で石の門と水尾城の間にあたり、石の門から数百m南側に位置する場所に「土の門」と呼ばれた土塁で築かれた出入口があったが、過去の林道工事によって今は見ることができない。

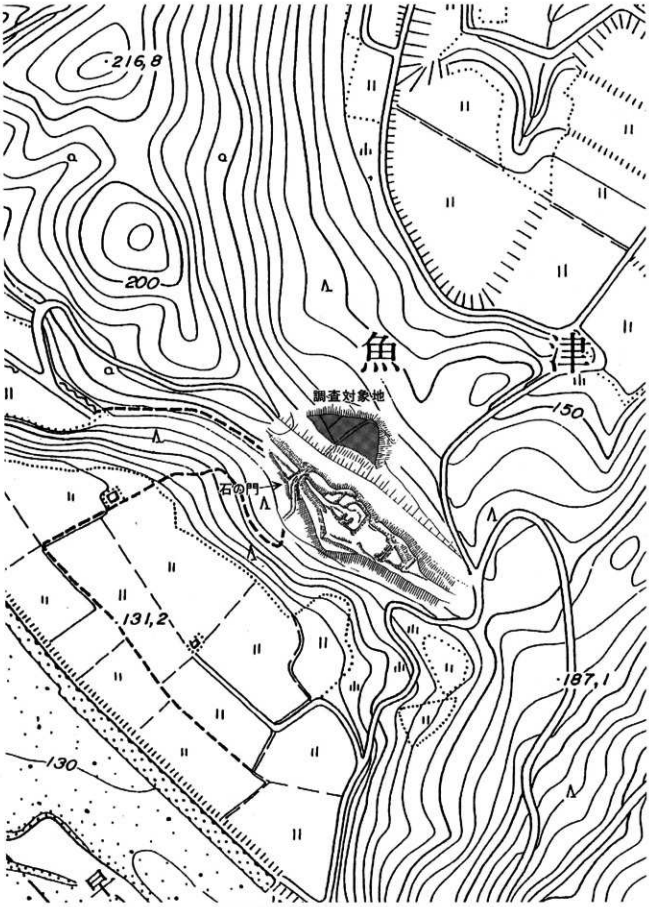
平成16年度の試掘調査の対象地は、早月川から鹿熊集落側へ向かって石の門を通過して20m程の旧道（通路）の両脇に広がる平坦面である（第３図参照）。標高は166～172mで、平坦面の中にはさらに複数の小規模な削平地が認められる。現在はその段状の削平地に杉が植林されている。この石の門付近の平坦面を調査することで、その造成時期の特定や建物跡などの確認を行い、この通路や石の門の築造時期を知る手掛かりを得ることを目的としている。

２．水尾城跡について

魚津市の南西部、角川左岸・早月川右岸の鹿熊字水尾山（標高302m）に位置する山城である。松倉城からは角川を挟んで西方約１kmの地点にある。城は細長い丘陵尾根上を成形し、南北約350m、東西180mの範囲に６ヶ所の空堀で区切られた四つの曲輪を設けたものである。各曲輪の概況は、後述、「２．調査の成果」において触れる。南北朝時代の様相を記した『得田文書』によると貞和２（1346）年７月、北朝方の能登守護・吉見頼隆の軍勢が、前越中守護・井上俊清の討伐のために「水尾南山要害」と「水尾城」を攻めたと記されている。これ以後、水尾城が文献史料には登場せず戦国時代の状況などははっきりしない。

３．升方城跡について

市の南西部、早月川右岸にある升方集落の東方に位置する山城である。松倉城跡からは、角川を挟



第３図　試掘調査対象地区とその周辺図（S＝1／2,500）

高橋成計1992「越中松倉城塁群の考察」『越中の中世城郭第２号』掲載略測図を合成

んで北西約1.8kmの地点にある。城山（標高240m）山頂部には、2箇所の出入口を設けた、通称本丸（50m×20m）とそれを取り囲む帯曲輪状の二の丸（85m×55m）によって主要部分が形成されている。城の範囲は、南北250m、東西270mの規模をもつ。本丸・二の丸のそれぞれに井戸跡や土塁、石積みが見られる。周囲には竪堀を巡らせ、特に南西部は、24基の竪堀が集中する畝状空堀群が築かれ、この城の最大の特徴といえる。江戸時代の史料（『越中古城記』、『三州志』等）には松倉城主椎名氏の家老・小幡九助（九郎）や岡崎四郎義村、佐々成政の家臣・佐々新左衛門、前田利家の家臣・竹田宮内を城主に置いたとされる。

Ⅲ．調査の概要

1．調査の方法

試掘調査地の選定にあたっては、（1）圃場整備による掘削の影響が少ないと思われる地点、（2）現地やその近隣で中世期の遺物が採集された地点、（3）字名や通称名によって何らかの遺跡が想定される地点、（4）城郭研究者や地元鹿熊地区の方々の意見を基に、地権者の同意が得られた地点を勘案して調査対象の候補地としている。

試掘調査を始める前に基準杭の設置を行うため、調査区範囲内に4箇所の杭を設定した。発掘調査作業は、人力による掘削で、表土を除去し、層位を確認しながら遺構検出面一部地山まで下げた。掘削作業の終了したトレンチから土層堆積層位図・遺構平面図を作成し、記録につとめた。図化作業は、作業の効率化を図るため一部業者に委託し、発掘調査終了後に図面の合成・統一作業を行った。出土遺物は、各トレンチごとに出土地点・層位を記録して取り上げた。調査終了後に埋め戻しを行い、12月24日に現地調査を終了した。

2．調査の成果

（1）地形測量調査

地形測量は業者委託により、縮尺500分の1（主曲線50cm）とそれを縮小した1000分の1の測量図を作成した。城の現況地形の上場と下場、石積み等を書き加えた「遺構平面図」とそれに等高線を加えた「地形測量図」の2種類を作成した。水尾城跡の測量に際しては、事前に担当者と測量業者が共に地形や遺構の確認作業を行い、従来の縄張り図も参考にして、可能な限り遺構図に反映させている。なお、本報告書に添付した升方城跡の測量図は平成15年度、水尾城跡の測量図は平成16年度事業でそれぞれ作成したものである。

①水尾城跡の概要

作成した遺構平面図を見ると、丘陵尾根上を空堀によって区画された曲輪が連続して築かれているのがわかる。便宜上、各曲輪を北側から順に、Ⅰ～Ⅳ郭として記述する。Ⅰ郭は南北63m、東西48mで、各曲輪のうちで最も大きく広い。三段の築成で、土塁や西側に帯曲輪を備える。曲輪の北側には空堀を2基配し、空堀のさらに北側の緩斜面に小規模な削平地が見られる。Ⅱ郭は南北40m、東西20mで、東側に帯曲輪を配する。南北に幅約10mの堀切で区画される。Ⅲ郭は南北16m、東西19mで、両端に幅約8mの堀切と土塁を備える。北側堀切斜面と南側土塁の基部には石積みと考えられる箇所があり、曲輪の面積は狭いが強い防御意識を感じることができる。Ⅳ郭は、南北74m、東西15mの規模で東側に帯曲輪を設ける。南端にある空堀の外側には削平地と切岸を築き、南側に対する防御を図っ.

ている。

②升方城跡の概要

通称本丸、二の丸部分のある山頂部から、西側にある升方集落の方向へ続く曲輪（三の丸）・通路が築かれている。本丸・二の丸へいたる出入口は2箇所あり、西側が大手、南東側が搦手口と考えられる。二の丸大手側出入口へ至る削平地には、二列の石積みが並行して見られる。また通路や曲輪の北端部に沿うように土塁が築かれ、切岸も顕著である。城の周囲には堀切や横堀の他に、竪堀が40基以上築かれ、それらが連続して配置された畝状竪堀群はこの城の大きな特徴といえる。松倉城塁群を構成する他の山城の中でこの城の形態が著しく異なる点は、築城時期や築城者の違いを考えなくてはならない。

（2）試掘・確認調査

トレンチは調査対象地内に見られる階段状の削平地で、礎石や柱穴などを確認するために4箇所、通路（旧道）部分に2箇所、旧道より枝分かれした道に1箇所の計7箇所を設定した。トレンチは、5m×1～2mで、一部7m×1mとしたり、部分的に拡張した箇所の約71㎡を調査した。調査対象地の全体図やその標高及び各トレンチの位置は第4、8図に示した。

基本層序は、1層が黒褐色粘質土の表土・腐植土である。2層が褐色粘質土で、中世遺物の包含層である。3層は暗褐色粘質土で、上層中には川原石を主体とした石が数多く含まれている。50～80cmの巨石も見られる。この層からの出土遺物はない。地山は台地上でよく確認される黄褐色粘質土（ローム層）である。更に下層は、これまで鹿熊地区の発掘調査で広く認められている泥岩質の黄白色粘質土層が確認された地点もある。

1トレンチ（第5図）

層位　基本層序のとおりである。②層から中世土師器皿が4点出土した。平面図には図示した遺物の出土地点をそれぞれ示している。③層からは、40～50cm大の石がトレンチ全域に見られる。これらの石の規則的な配列は見られない。川原石と思われる角の丸い石や角張った石も混ざっている。それらの中には風化の著しいものもあった。

遺物　強いナデ調整により口縁端部を外折させたもの（1，3）や口縁端部外面を面取りし、上方へ摘みあげた形態をとるもの（2）がある。1の色調は浅黄橙色を呈し焼成は良好である。2は口径8.0を測り、色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。また内面に煤が少量付着する。3は口径15.0cmを測り、色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。この他に底部から体部にかけての破片も出土した。いずれも16世紀代の所産時期と考えられる。

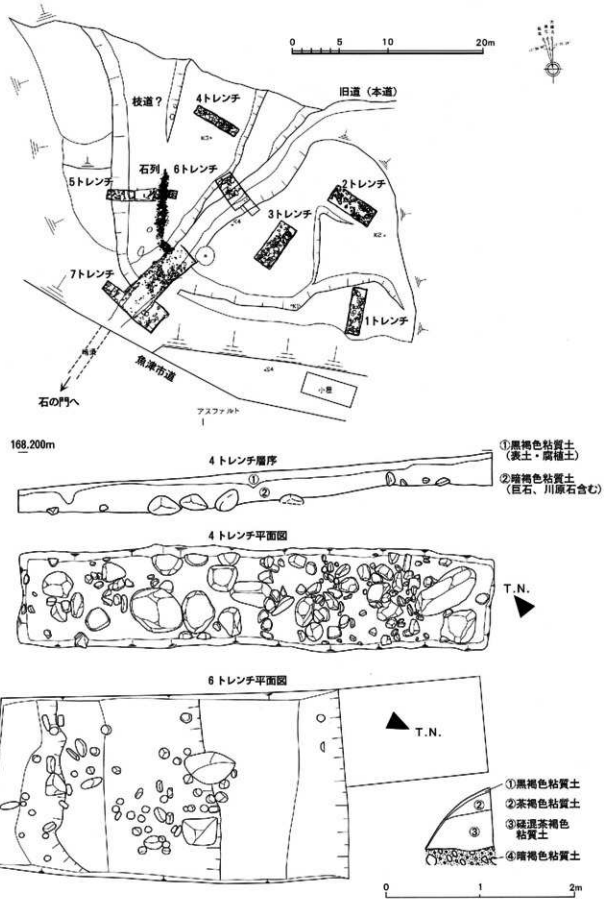
2トレンチ（第5図）

層位　削平されたためか基本層序の2層（褐色粘質土）が見られず、3層の暗褐色粘質土が②層として確認された。他のトレンチと比べると大きな石はなく、10cm大の小礫が認められる。中世土師器皿が出土したが、出土地点は①層と②層の境からである。

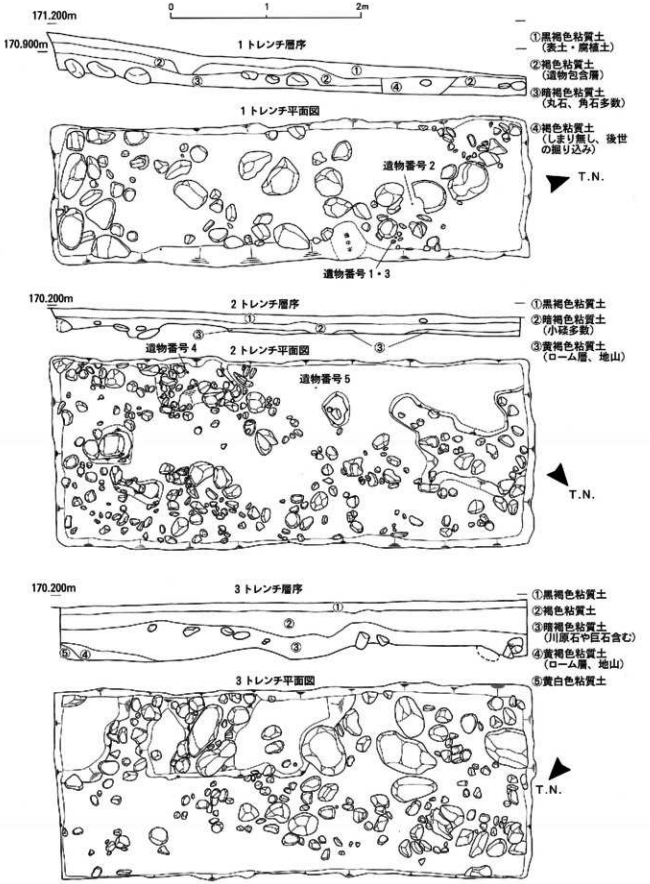
遺物　4は口縁部外面を一段のヨコナデ調整を行い、端部外面を面取りしている。口径は9.0cmを測り、色調は浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。5は摩滅が見られるが、4の口縁部とほぼ同じ形態を示すが、端部上方へのつまみが僅かに見られる。色調は浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。

3トレンチ（第5図）

層位　1トレンチ同様基本層序のとおりである。③層からは10～70cm大の石が多数検出された。規則性は見られないが、トレンチの南東側に見られる60～70cm大の石は、ほぼ直線的に並ぶ。しかしその



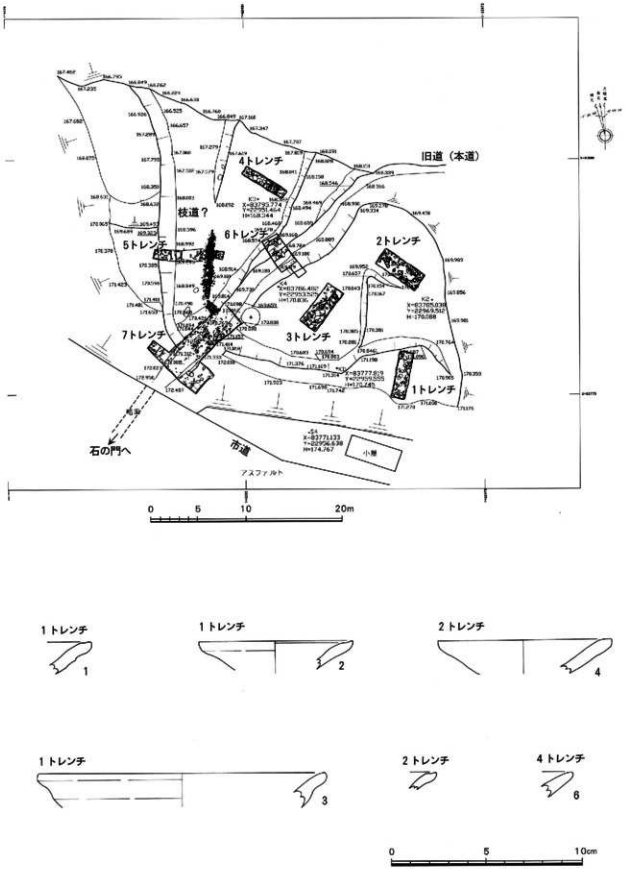
第４図　トレンチ配置図（Ｓ＝1／400）と４・６トレンチ層位図・平面図（Ｓ＝1／40）



第５図　１～３トレンチ層位図・平面図（Ｓ＝1／40）

第6図　5・6トレンチ平面図、エレベーション図（S＝1／60）

第7図　7トレンチ平面図（S＝1／60）



第８図　調査区全体図（Ｓ＝1／400）と出土遺物（Ｓ＝1／2）

表面観察からは礎石とは言い難い。遺物は出土していない。

4トレンチ（第4図）

層位　2トレンチと同様削平によるものか、表土直下に基本層位の2層（褐色粘質土）が見られず、石を多量に含む暗褐色粘質土層（②層）が堆積する。10～70cmの礫・石は調査区全面に見られた。

遺物　廃土からの出土である。おそらく1層と2層の間にあったであろう褐色土層に含まれていたものが混ざったものと考える。中世土師器皿の口縁部片であるが、摩滅が著しく所産時期は不明である。色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。

5トレンチ・石列（第6図）

鹿熊集落へと通じていた旧道（本道）から北側へ枝分かれした通路（枝道）がある。枝道の東側縁には、10～20cm程の小礫を小山状に積み上げている。調査前の除草作業中に一部を確認したため、覆われていた土を取り除き、全体を検出した。石列は、旧道に直交させて北西へ1.7m、さらにクランクし、北へ約7.5m続くもので、地表面との比高差は10～20cm程度である。遺物が出土していないために構築時期は不明である。枝道と考えられる通路と石列の堆積状況を確認するために、これに直交するように5トレンチを設定した。

表土（黒褐色粘質土層）を剥いで石列と同レベルで掘削を中止したが、一部深掘りを行い層位の確認を行った。表土（①層）直下は、石列と反対側の山側斜面では茶褐色粘質土層（②層）、続いて石混じりの茶褐色粘質土層（③層）となる。検出された石列はこの層の直上にある。また、この3層は、他のトレンチでも確認されていた多量の石が含まれている層と同一である。

6トレンチ（第4、6図）

旧道（本道）上に石列や石敷きの有無等を確認するために設定した。表土除去後は、通路部分に10～20cm程の小礫と40～50cm程の石が検出されたが、当初想定した石敷や石列は認められなかった。また3トレンチのある東側平坦面と通路の方の層位を確認するために深掘りしたところ、石を多量に含む暗褐色粘質土層（④層）が確認され上部には、茶褐色粘質土層が堆積していた。層序は他のトレンチとさほど違いは無く、どの箇所においても見られる④層の上層が、中世の遺物を含む褐色あるいは、茶褐色粘質土で覆われている点は、通路の方部分の形成は自然地形ではなく、人工的に造成されたものといえる。

7トレンチ（第7図）

6トレンチと同様、旧道（本道）上に石敷きや石組み、階段状遺構の確認を目的として設定した。表土除去後通路部分には、多数の石礫が検出されたが、階段や石組みと考えられる遺構は検出されなかった。ただ通路の北西側端部に石で線取りを施していた可能性がある石列が検出されたが、積極的に言及できるものではない。遺物は出土していない。

Ⅳ．調査のまとめ

今回の調査では、松倉城塁群を構成する山城の1つである水尾城跡の地形測量調査と、鹿熊・升方両地内に位置する石の門跡の試掘調査を実施した。石の門跡内にあり、城下へいたる人手門とも推測される石の門を通過してすぐに広がる平坦面（削平地）には、監視施設のようななんらかの建物の存在が推測され、その痕跡と出土遺物による所属時期の確認を目的としていた。その平坦面には、建物跡などの明確な遺構は確認できなかったが、調査によって出土した土器（中世土師器皿）の年代によっ

て、旧道及び平坦面の造成時期が16世紀代である可能性が高まったことは大きな成果といえよう。出土した遺物は、中世土師器皿のみの計12点（うち煤の着いた灯明皿が2点）である。遺物の所産時期から当遺跡は、16世紀代の活動期間が想定できる。これまで調査してきた松倉城塁群に関連する遺跡は、15世紀後半から16世紀代にかけて活動のピークがあることが確認されている。このことから、松倉城跡やふもとの城下町へいたる通路は15世紀後半には使用されていたことも考えられるが、監視施設など構築物を設けるための平坦面の造成や通路の本格的な整備などが、16世紀代に行われていたものと推察される。近隣にある石の門自体の発掘調査を行っていないため、石の門の構築時期についての積極的な言及はできないが、調査した平坦面と石の門は遺構としては連動したものであり、石の門の構築時期と平坦面の造成時期にさほど違いはないものと考える。

また調査では、川原石と思われる多量の石や礫がどのトレンチにおいても検出された。調査区一帯にこの川原石や礫が含まれているものと考えられ、さらにこの付近の丘陵上を踏査しても、多数の石が散見される。石の門は、これまで丘陵ふもとを流れる早月川の川原から、馬や丸太を用いて巨大な石を搬入し、積み上げたものであると考えられている。しかしこの丘陵上には早月川の川原石をはじめ巨石や礫が多量に含まれているものと考えられ、石の門の構築に際しては、平坦面造成による丘陵掘削作業によって出土した多量の石を使用した可能性が指摘できる。

次年度は、松倉城塁群を構成する山城のうち、松倉・魚津両城の北側に位置する天神山城跡の地形測量調査を実施する予定である。本城は、天正10（1582）年の魚津城の戦いの際に、織田方の軍勢に取り囲まれた魚津城を救援するために上杉景勝が陣を敷いた所として知られる場所である。山頂部には本丸・二の丸と呼称される曲輪が見られ、その周囲には土塁や堀、幾段もの削平地が確認できる。

現在この城は市の史跡に指定されており、今後の保存・活用策を検討していくことが必要とされている。そこで現存する遺構の状況を把握するための基礎資料の作成を目的としている。

参考文献

魚津市史編纂委員会	1968	『魚津市史上巻』
〃	1982	『魚津市史史料編』
魚津市教育センター	1982	『魚津の自然』
魚津市教育委員会	1996	『魚津の文化財』
〃	2002	『松倉城塁群発掘調査報告Ⅰ』
〃	2003	『松倉城塁群発掘調査報告Ⅱ』
〃	2004	『松倉城塁群発掘調査報告Ⅲ』
新人物往来社	1980	『日本城郭大系７』
高橋成計	1992	「越中松倉城塁群の考察」『越中の中世城郭第２号』富山の城を考える会
麻柄 一志・塩田明弘	1999	「魚津市松倉城跡の試掘調査」『魚津市立博物館紀要第５号』魚津市教育委員会

水尾城跡空中写真（早月川から角川方面に向かって撮影）

水尾城跡空中写真（手前が水尾城跡、その奥が松倉城）

石の門・正面

石の門脇の市道

石の門脇の市道より調査区を望む

旧道（奥に石の門）

斜面中央の石積み（1）

斜面中央の石積み（2）

旧道（本道）石の門側から鹿熊方面へ向かう

旧道を挟んだ二段の平垣面

図版4

1トレンチ

2トレンチ

3トレンチ

3トレンチ石碑検出状況

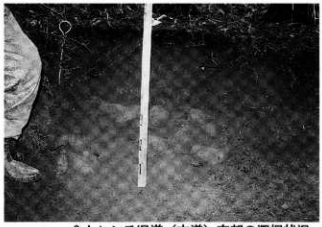
4トレンチ

5トレンチ（中央に枝道石列）

5トレンチ（石列脇の深掘区）

6トレンチ（石の門側より松倉城方面へ）

6トレンチ旧道（本道）上の石積検出状況



6トレンチ旧道（本道）方部の深掘状況

7トレンチ

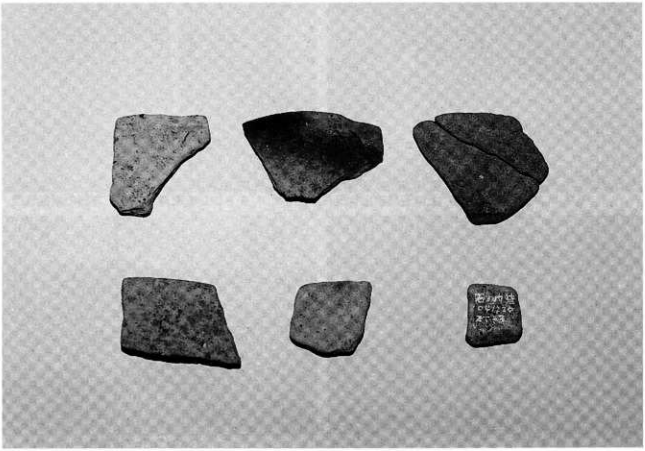
7トレンチ（枝道側から本道へ）

7トレンチ（石の門側より松倉城方面へ）

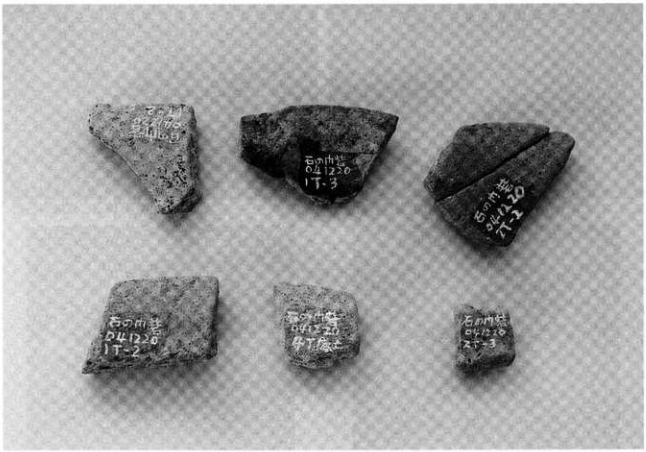
枝道と道端の石列

枝道と道端の石列（本道側より）

枝道と道端の石列2（奥が本道）



出土遺物　中世土師器皿（外側）



出土遺物　中世土師器皿（内側）

報告書抄録

ふりがな	まつくらじょうるいぐんはっくつちょうさほうこく
書名	松倉城塁群発掘調査報告Ⅳ
シリーズ名	市内遺跡発掘調査等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（4）
編集者名	塩田　明弘
編集機関	魚津市教育委員会
所在地	〒937-0066　富山県魚津市北鬼江313-2　TEL0765-23-1045
発行年月日	西暦2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
石の門砦	たやまけんうおづし 富山県魚津市 くろくま 鹿熊	市町村 16204	遺跡番号 204089	36度 45分 8秒	137度 25分 35秒	20041202～ 20041224	71	市内遺跡発掘調査事業

所収遺跡名	主別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石の門砦	城館関連	中世		土師器皿	戦国期の造成・整地層を確認

富山県魚津市
松倉城塁群発掘調査報告Ⅳ

発行日　平成17年3月31日
編集・発行　魚津市教育委員会
富山県魚津市北鬼江313-2
TEL（0765）-23-1045
印刷　魚津印刷株式会社